アルター能力者・緑谷出久

ロクゼロ

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
緑谷出久。
折寺中学校出身、老練なる男。
その男が疑念に思っていた真実が、轟焦凍の口から明らかになる。
迸るは激情。
流れ出るは血涙。

ナレーション（若本規夫）

目　次

轟ｖｓ緑谷（アルター・エイリアス）――――――――1
轟焦凍：オリジン――――――――5

轟ｖｓ緑谷（アルター・エイリアス）

体育祭最終種目２戦目。

個性〝空気圧縮〟を使い、空気を打ち出すことで心操に勝利した緑谷出久。

対するは個性〝半冷半燃〟を持ちながらも氷結のみで瀬呂を降し勝ち上がった轟焦凍。

その二人の戦いの幕が切って落とされようとしていた。

「…もう一度聞く。君は左の力を使わず、右の個性のみで私と戦うわけだな？」

「……」

「…なめられた物だ。良かろう…だが！そちらが本気を出さないのであろうとも！こちらが全力を出さない理由にはならない!!」

出久の叫び声と共にフィールドが削られ、出久の周囲と正面に虹色の光源が現れる。

「ちょ、ちょっと緑谷君！まだ試合開始の合図は…て言うか何コレ!?」

「相手への攻撃ではなく準備するための物は問題ないと聞いている！」

「準備って……ええっ!!?」

審判であるミッドナイト、そして観客も驚愕の声を上げる。

それはそうだ。

出久は入学試験から今まで圧縮という個性を発動する時は他の人

達と同じように素手で行っていた。

だから驚愕するのも無理はない。

虹色光源が晴れたその場所に…

武装された出久と、その前方に佇む隻腕のロボットが現れたのだから。

「えっ、ちょ…緑谷君!?」

『な、なんだぁありゃぁ!!!』

『ここで使うか……緑谷』

『おいイレイザー!何か知ってるのか!?ちょっと説明!!』

『……個性同士が混ざり合い変質していく中、〝個性特異点〟と呼ばれるもう1つの可能性……最近ヒーロー協会が発表したアレだ』

『アレ……って!まさか緑谷が…!?』

『周囲の物質を分解、そして再構築して現す個性』

『Ａｌｔｅｒａｔｉｏｎ…通称〝アルター〟、それが緑谷の個性だ』

本人からは著しく体力を消耗するのと個性の特質上悪目立ちするため、自分の命に危機が迫らない限り発動しないと相澤は聞いていた。

だが今、それを覚悟した上でアルターを発動させた出久を相澤は目を細めて様子を見る。

「…初めて見せることになるかな。空気圧縮の個性をアルター化させた物、名は〝アルター・エイリアス〟。ヒーロー協会から与えられた名前だ」

轟の顔から冷や汗が流れる。
試合前で突然変貌した出久と、目前に現れた隻腕のロボット。
出久の空気圧縮ですら脅威と感じているのに、ロボットの性能がどういう物か…轟に推し量る術がなかった。

「さあ、侵攻と攻撃を開始しよう。自覚と覚悟はいいかね？轟焦凍」
「…一位になるならどの道お前を倒さなきゃならねんだ。…そうだ、誰であろうとやることは同じだ」

「んんっ…気を取り直して。レディファイト!!」

ミッドナイトが咳払いをし開始の合図を出す。

先手必勝。
出久が攻めて来る前に氷結で一回戦同様会場半分を凍らす轟。

「攻撃される前に封殺する、考えはいい」
「ッ!?」

凍らせたはずの出久の声に目を向け警戒する。

「まさか、周囲の空気を圧縮して放出を…そんな芸当…」
「できるからやっている。私に物理的攻撃は無意味ということを伝えておこう…エイリアス!!」
「!!」

出久と共に凍らせたはずの隻腕のロボットが目前に現れた事に驚愕しながらも、氷結で牽制しつつ後方へ下がり距離を取ろうとする。

そう、下がろうとした。

だが轟は何かに吸い寄せられるような力を感じ、急いで足と地面を氷結で繋ぎ止めた。

「これは…」

「ほぅ…エイリアスの吸引、自らの足を凍らせて回避したか」

「だが…!」

エイリアスが接近し、轟に隻腕の一撃を喰らわせる。

足を凍らせていた轟にこれを回避する術はなく、なんとか腕で防御するももろに攻撃を受けてしまう。

「グゥッ…!」

吹っ飛びながらも轟は受け身を取り体勢を立て直す。

「さあ、使いたまえ!左の力を!!」

「……うるせえよ」

「…いざという時にも力をセーブしようとする、中途半端に明日を夢見る。それが敗北を招くのだ、轟焦凍!!」

氷結のみで倒すと決めている轟。

だがエイリアスの猛攻に対して防戦一方となるのだった。

轟焦凍：オリジン

轟の繰り出す氷結が対戦相手である出久とエイリアスに向けられる。
だがその攻撃全てが出久の個性として現れた力…〝エイリアス〟の空圧砲により妨げられる。

授業やＵＳＪ事件で見てきた物とは違う、出久の力。
自立起動で動く〝エイリアス〟と、自らも武装を装着する個性…その圧倒的な強さの前に轟も攻めあぐねていた。

「どうした！出したまえ！君の本気を!!それとも同級生には力を出せないのか？それほどまでに君は律儀な男か!!」
「……」

氷結による身体の冷え。
それにより動きが鈍くなっている轟に対して出久が叱咤する。

普通なら特待生であり、体育祭２種目を上位で突破したエンデヴァーの息子である轟に対してその発言は身の程知らずと言われるだろう。

だがこの試合を見ている観客は、この発言をした出久に対して侮蔑的な視線を向けていない。

何故なら試合が始まってから出久は、その場から一歩も動いていないからだ。

遠距離からの氷結は全てエイリアスに遮られ、接近して直接掴もう

とすれば出久自身が武装している個性で吹き飛ばされてしまう。
しかも段々と動きが鈍くなっている轟を追うのは誰の目から見ても難しくはなかった。

「…だったら初戦でぶっぱなしてねえよ!!」

狙いを一点に…出久に定め、今まで見たことのない速度の氷結を繰り出す轟。

「違う！足りないッ！その程度の抵抗など見たくもないッッ!!」

最高速…今まで以上のスピードを思わせる速さの氷結さえも、出久の両手の武装から放たれる空圧砲で押さえ付けられる。

「エイリアスッ!!」
「チッ!!」

飛び出してくるエイリアスに舌打ちしながらも氷結で足止めをする轟。
だがエイリアスに意識を向けている隙を逃すほど出久はお人好しではない。

「この程度かぁ！君の力は!!」
「ガハッ!!」

出久は装備された両腕の空圧砲を利用し、一気に轟の目前まで飛び込み…正面から殴り飛ばした。

殴られた勢いで地面を転がるが、場外に落ちるギリギリで踏ん張り外に出ることを堪える。
思いっきり拳を喰らい、ふらつきながらも立ち上がる轟。

だが力の差を明らかにされ、戦意が少しずつ削れていくのを体感する。

「これでは母親の仇はとれないな！」

「…ッ!!」

失いかけた戦意。

それが出久の罵倒により再び燃え上がる。

「大切な物も守れない！信念も貫き通せない!!」

父親に向けていた憎悪…

轟の中で、それ以上の怒りがふつふつと沸いてくる。

「母に申し訳ないと思わないのか！一歩たりとも前に進めず、それでも父への憎悪を盾にして右の力に執着する!!」

「それでも！それでもここでヒーローを目指している男か!!轟焦凍ッ!!」

大切な母親を出しての罵倒。

それは轟の逆鱗であり…怒りを爆発させるには十分の言葉だった。

「貴様ぁぁぁぁぁ!!」

「ッ!?」

轟の左から燃え上がる炎。
絶対に使わないと言っていた父親から引き継いだ個性。
それが出久の言葉によって引き出された。

この試合を見ていたエンデヴァーは内心焦っていた。
テストベッドとして有益だと思っていた出久の圧倒的な力。
これほどまでに完璧に個性を扱い、息子を圧倒する者。
例え息子が左の力を使う切っ掛けになったとしても、あの力はエンデヴァーですら脅威と感じている。
それを相手に焦凍が勝てるかどうか……

「……緑谷出久、ヤツは何者だ…?」

左の炎により体温が正常に戻る轟。
出久から目を離さず左手を握ったり広げたりし、自分の感覚を確認する。

「…力が欲しい訳じゃない。ただみんなを救えるヒーローに……母さんも笑顔で見てくれるヒーローになりたい…それだけだった」

ぐっと拳を握り、出久を睨み付ける。

「ああ、そうだ…今でもそうだ。そのためにお前を倒さなければならないのなら、あとはもう…何もいらない!!」

左手に炎、そして右手に氷を出し…力をためる。

次の一撃で出久を倒す…憎悪は消え、その意志だけが轟の瞳に宿っていた。

「そうだ、その目だ…それでいい。それが見たかった」

「だが！私とて退くわけにはいかない……エイリアスッ!!!」

轟の攻撃が来る前にエイリアスを突撃させる出久。

だがそれを予見していたかのように轟は氷結でエイリアスを固め…

左の炎で、出久をも飲み込む最大火力を放った。

「…いい目になったじゃないか、ヒーロー」

轟の目を見て満足そうに呟いた出久。

だがその声も炎の直撃と、冷えた空気の膨張による爆発にのまれ…掻き消されていった。

爆発により場外へと弾かれた出久は失格となり……三回戦への切符は轟の物となった。

「…緑谷、どうしてあんなことをした」
「……なんの話かな」

治療室で寝ている出久の横に座る轟。
思いっきり背中を壁にぶつけたため治療室へと運ばれたが、特に異常も無かったのでそのまま寝た状態になった出久。
勝負に勝利した轟は次の試合のため他の試合も見るべきだが、さっきの怒りを誘発するような言動が気になるため出久の横で起きるまで待っていたのだ。

「…お前の挑発がなければ、俺は左を使わず…そのまま負けてただろうよ」

右手しか使わない轟に圧倒していた出久。
たしかに、そのまま勝負を続けていれば出久は確実に勝ててただろう。
だが出久はそれをせず、轟に全力で来るよう挑発した。
全力で来る相手を倒して実力を見せる…たしかにそういう人間もいる。
だが轟が知る限り出久はそういう類いの人間ではない。
むしろ勝機を見ればその点を突いて勝ちに行く人間だ。
だからこそ、轟は勝ったことに喜びはしたもののその疑問だけは心に残っていた。

「…君の目を見たからだ」
「俺の目…？」

優しげに微笑みながら出久は続ける。

「戦闘訓練で初めて君を見た時、私は目を離せなかった」
「他者を守るための氷、敵を倒すための炎…その２つを兼ね揃えた

ヒーローがそこにいたのだから」

「だが、それを使う本人の目はヒーローとは違う…何か得体の知れない物を映していた」

「一体何が君の瞳を曇らせているのか……それを知ったのがついさっき、騎馬戦が終わった後だ」

「父親への畏怖と憎悪、母親への後悔と懺悔…学生が背負うにはあまりにも酷すぎる過去を、君は一人で抱えていた」

「復讐に似た君の目的…それを否定するつもりはない。だが、それでは君自身が救われない…何よりも轟焦凍というヒーローの未来が閉ざされてしまう」

「…まさか緑谷、俺を怒らせたのは……炎を使わせたのは…」

「氷結と火炎、その2つを使い私を倒す時…君の目は濁った復讐心ではなく、私を倒す真っ直ぐな瞳をしていた」

「すまなかった…本気を出させるために、私は君のことを酷く罵倒した…」

「緑谷……お前、なんでそこまでして……」

「君の救いに、なりたかった」

異常が無かったとはいえ、強打により身体が起こせない出久は握手を求めるよう…ゆっくりと右手を轟に差し出す。

「許しを請える立場ではないのは重々承知の上だ…だがせめて、健闘

した君と握手を交わしたい」

相手から憎まれようとも救おうとする出久の行動。
それに比べ、自分勝手な感情で戦っていた自分があまりにも小さく見えた。

轟は言葉にできない感情を抱き、差し出された手を強く握った。

「ありが…」
「礼を言うな、緑谷」

出久の言葉を轟が遮る。
許される立場でないのは知っている…だから出久は悲しそうな顔をしながらゆっくり頷いた。

「違うだろ……礼を言うのは、俺の方だろうが……」

助けられた上に礼まで言われたら轟に立つ瀬がない。
だから轟は出久の言葉を遮り…頭を下げた。

「……ありがとう、緑谷…」

轟の心の底からの感謝。
それを見て出久は、静かに微笑み……ゆっくりと眠りについた。